

# 小児がんにより長期入院している小児の母親が認識する 父親の役割と変化と意思

江里 文<sup>1</sup>・大町いずみ<sup>2</sup>・森藤香奈子<sup>2</sup>・滝川由香里<sup>3</sup>・中尾 優子<sup>2</sup>

**要旨** 本研究の目的は、小児がんの患児をもつ父親の役割が入院前後でどの様に変ったのか、母親が認識する父親の役割変化とその意思をインタビューにより、明らかにすることである。結果、児の病状が安定した療養生活を送っている時期、父親の役割変化を母親は、【家事はしない、してもちょっとしたもの】から【可能な家事を自ら行う】へ、【関心のある範囲内での子どもの相手や世話】から【入院を支える】【母親、子どもの心身のサポート】、【私（母親）とは異なる子どもへの関わり】と役割が拡充していると認識していた。この役割変化により、母親の意思は父親への【依存されている苛立ち】あるいは【あきらめ】から【有難い存在】【がん闘病の過程を共に乗り越えている実感】【頼りがいのある父親】へと父親の存在を高く評価していた。

保健学研究 23(2): 15-21, 2011

**Key Words** : 小児がん, 父親の役割, 役割の変化, 母親

(2011年4月3日受付)  
(2011年6月30日受理)

## I. 諸言

小児がんは、化学療法の進歩により生存率も上昇し、長期的な経過をたどる慢性疾患となった。しかし、治療成績が改善したといっても、20%近い患児は再発や合併症で死亡すると言われている<sup>1)</sup>。治療には数ヶ月間の入院を要し、家族は不安を抱えるだけでなく、生活にもさまざまな変化が現れる。特に、多くの母親は付き添いの生活を送っているため、夫婦での時間をもつことが困難となる。森は白血病で長期入院する患児をもつ夫婦の離婚率は高いといい、家庭崩壊の影響要因として、「強い心身の疲労、夫との不仲、夫のサポートが少ない、ネットワークが少ないなど」が確認されたと述べている<sup>2)</sup>。また、父親は家族を経済的に支えるために外での仕事を続けなければならない、面会時間によっては子どもに会えず医療チームから少し外れてしまう感があると、小澤らは述べている<sup>3)</sup>。さらに、橋爪らは、小児がん患児をもつ父親に、「小児がん患児の発症前後での父親の生活と役割意識の変化」の研究を行い、父親は患児の発症による精神的苦痛に加え、家事や育児の負担の増える中、休養やリフレッシュする時間が十分にとれず、心身ともに厳しい状況にあると考えられたと述べている<sup>4)</sup>。

一方、田邊らは「小児がん経験者の子どもを持つ父親と母親の語りからみる療養生活構築のプロセス」で、入院中に夫婦としてうまく機能していたと思われた家族1組を対象とした研究を行い、父親と母親は共通の目的を

持って子どもの病気と向かい合い、お互いの考えを確認しあっていたと述べていた<sup>5)</sup>。

家族システムの中での良好な夫婦関係は、小児の闘病には不可欠なものであり、夫婦間の強固な関係へのサポートについて医療者のアプローチが必要である<sup>6)</sup>。しかし、父親の変化を母親がどのように認知し、どのような意思でいるのか調査研究は少なく、母親側からの介入について具体的な策が十分ではない。そこで、患児の病状が安定し、療養生活を送っている家族の母親を対象に、インタビューを行ない、医療者が入院後の母親にできる具体的な働きかけの示唆を得るため、母親が認識する父親役割の変化とその意思を明らかにすることにした。

## II. 研究方法

### 1. 研究デザイン

質的記述的研究デザイン

### 2. 研究対象者

小児がんで半年以上入院している患児をもち、入院前より夫婦が同居している母親であり、かつインタビュー及び研究への同意が得られた3名とした。

### 3. 調査期間

平成22年8月23日-10月30日

1 長崎大学病院

2 長崎大学医歯薬学総合研究科・保健学専攻

3 長崎大学医歯薬学総合研究科保健学専攻修士課程

#### 4. データ収集方法

研究者によるインタビューガイドを用いた半構成的面接法を行った。面接内容は、入院前後の父親の様子（母親・患児・家庭に対して）、母親が感じる父親の変わった部分、変わらない部分、現在の生活の満足感、父親への要望とした。面接時は許可を受け、ICレコーダーを使用し、レコーダー記録は逐語録に起こし、記述資料とした。カルテより、年齢、入院期間、性別、家族構成、付添い状況、家族の収入源について情報収集した。

#### 5. 分析方法

逐語録を繰り返し読み、十分にデータの理解を行った。逐語録から母親が認識する入院前後の父親の役割と意思に関連する文脈を同時に抽出（対象者の言葉のまま）し、内容の類似性について検討し類型化した。類型化の方法は、抜き出されたそれぞれの文脈に還りながら、その状況における対象者にとっての意味内容が同じものを集め、共通する意味をカテゴリとして表した。さらに、母親の父親への思いを構成している現象について再構築し、構造化を試みた。データ分析は、おもに2名の研究者が行い、他の研究者2名にスーパーヴァイズを受け、信頼性と妥当性を確保することに努めた。

なお本文中の表現「入院前後」は、「発病前後」と同義として使用する。

#### 6. 倫理的配慮

研究対象者となる母親に研究の主旨と自由意思による参加、途中棄権の権利について口頭と文書で説明し、同意を得た上で、インタビュー及びカルテからの情報収集を行った。入院している病院からは研究の承諾を得た。本研究に取り組むにあたり、長崎大学医学部保健学科倫理審査委員会の承認を得た（審査承認番号10072288）。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 研究対象者の概要

表1に対象者の概要を示した。患児の入院期間は6か月以上、平均は11か月であり、対象者全員が患児の入院に付き添い、夜間や休日に父親と交代する生活を送っていた。入院前後を通し、主に父親が経済的基盤を担っていた。

患児の年代は、幼児、小学生低学年、中学生であり、性別は男児1名、女児2名であった。家族構成はいずれも核家族で、患児には同胞があった。以下、データの区分のため、対象者をA・B・Cで表す。

#### 2. 入院前後での父親の役割

以下【 】は、カテゴリを示す。インタビューでの対象者から得られた言葉は、斜文字で示す。

母親が認識する父親の役割の内容は、入院前では【家事はしない、してもちょっとしたもの】、【関心のある範囲内での子どもの相手や世話】であり、入院後が【入院を支える】、【可能な家事を自ら行う】、【母親、子どもの心身のサポート】【私とは異なる子どもへの関わり】であった。

##### 入院前

##### 1) 家事はしない、してもちょっとしたもの

家の中のことは、ほとんど私でした、家のことは、あんまりしませんでしたね、洗濯物干したりとかそういうの、ちょっと昼間ちょっとラーメンをつくったりとか、そのくらいはちょっとしてくれましたけどね、少しはしてくれただすけどね（A）

今までがどちらかというとあまり家事とか・・・家事はあんまりしないですね。子育てっていうか上の子たちに対して、わけ隔てなく（育児は）やってると思う（B）

掃除とかご飯（の用意）とかは全くしない人だった、ごみの日も知らないと言われて出すみたいな感じだった（C）

##### 2) 関心のある範囲内での子どもの相手や世話

土日なんか（部活の）送り迎えするぐらい、父親もそんなことはしてくれました、送り迎えしたり、野球を見たりとか、勉強の分からないところを見てやったりとかしてました（A）

前は、子どもたちの部活とかに対してすごく見てくれたりしました（B）

子どもの世話は、言ったこと、これをしてとか、着替えさせてとかお風呂に入れるとか、いうのはだいたいしてくれました（C）

表1. 対象者の概要

	年代	性別	入院の期間	家族構成	付添い状況
A	中学生	男児	17か月	父、母、兄、姉	母：月-金 父：土日
B	幼児	女児	8か月	父、母、兄、姉、姉	母：毎日朝-夕方 父：夜
C	小学生 (低学年)	女児	10か月	父、母、妹、弟	母：父が交代してくれる日以外 父：仕事の休日

入院後

1) 入院を支える

あたしがここに安心して付き添えるのもやっぱり主人が仕事してくれてのことだから (C)

2) 可能な家事を自ら行う

おばあちゃんと主人はまあまあ仲がよく、一緒にご飯食べよーって言って食べてますが・・・お父さんは家にいれば、家で自分のことはどうにかしています (A)

おばあちゃんが泊まりにきてくれて、でそのとき交替して、(急いで) で家に帰ったら、なんか、子どもたちと一緒にご飯を作ったりとか (B)

今じゃもう自分でごみも出して、自分の分ぐらいなら食器も洗ったりとか、朝は主人が出してるんですよ、学校と保育園と下の子たちを出してるから、軽い、ほんと特別味噌汁作るとかはしないんですけど、例えばおにぎりとかパンを焼いたりとかは、して出してくれるんですよ、仕事が暇だったら洗濯もしたりとかします (C)

3) 母親、子どもの心身のサポート

子どもの状態でやっぱりよく気をつけて…どうね? 今日どうね? ってほしい電話連絡をして子どもの様子を聞いて心配して、聞いてきましたね、今日どうね? っていう感じで治療の様子はどうね? とか採血はどうね? とか聞いてましたね、土日は仕事もないけん、自分が交代するよって、それはすすんで言ってしてくれました (A)

平日の夜は、主人が見てます。基本かわいがってます。 (B)

自営業なので、まちまちなんですけど、暇な時期は早く終わったら来てくれたりとかしてました、やっぱり心配っていうのもあって、あとお昼間にも電話があったりとか、なんにもないけどどうしてるのかとか、ちょっと気にしてかけてきたりとかしてました、やっぱり調子悪いときとか特に…、あたしもやっぱりどうしてもたまには外に出たいっていうのがあるので、ちょっと夕方早めに来てもらえたら、ちょっと出たりとか、休みの日は1日代わってくれてます (C)

4) 私とは異なる子どもへの関わり

自分が野球してたので、その野球の試合はどうだったとか、(患児も) お父さんに聞いてきて(わたしに) 報告するんですよ、それとか、今あってるテレビのプロ野球とか、甲子園や見て、(お父さんと) 話が合うみたい (A)

私としてもう今までこう隠さずに下の子どもたちにも何でも話してきたので、隠すつもりはなかったんですけど、でもこう、どういうタイミングで言おうかなっていうのはやっぱり色々考えてはいたけど…でも (患児以外の同胞に患児の病気のことを) 言ってくれた (B)

3. 母親が(患児が)入院する前後で感じる父親への思い  
母親が感じた思いの内容は、入院前では家事に関する

父親への思いが主であった。【依存されている苛立ち】、【父親への要求】、【あきらめ】であり、入院後が【有難い存在】、【がん闘病の過程を共に乗り越えている実感】、【父親への気遣い】、【変化の肯定的な受け止め】、【頼りがいのある父親】であった。

入院前

1) 依存されている苛立ち

バタバタして、食事のね、料理とかね、してるのにか思いながら、もう男だからノロノロしてていいよねとか思いながら私だけがイライラして愚痴をいってました、2人、ホントけんかすることも多かったです (A)

あっためるのでも、もうあたしがいたら(料理を) 温めもすらしらないぐらいの人でした (C)

2) 父親への要求

もうちょっと家庭のことを手伝ってはもらいたかったんですけど、あまりしてくれなかったですね (A)

3) あきらめ

どうにか言えば、どうにか動いてくれるかなっていうタイプですね (A)

子どもたちの部活とかに対しては、すごく見てくれてたんですけど、家のほうはしない (B)

あんまりだいたい好きじゃないんですよ家事は、他の事はするんですけどね、苦手みたいですね (C)

入院後

1) 有難い存在

やっぱり父親、おばあちゃんたちの協力は本当ありがたいなあって思って感謝しています、土日は自分があるよって嫌がらんで、きてくれましたねえ、私はずっと平日いるから、休みはおい(父親) がするよーって、おいがいるからいいよって言うてくれましたね、それはありがたいですね (A)

1番上の子が高校入学だったので、どうしてもお弁当を作らなきゃいけない、っていうのがあって、やっぱり平日は、自分が夜…病院じゃなくて、家にいるほうが、朝から弁当作って、(学校に送り) だすことはできないけれど、(子ども) の弁当を作る、っていうのがあったんで、この形(平日の夜父親が付き添ってくれること) でよかったなあ、思ってます (B)

いまのところはもう、十分してくれてます (C)

2) がん闘病の過程をともに乗り越えている実感

うーん、まあ、あのなんだろう(この子のこと気づけて…) 自分もあの、(そばに) いれるときは一緒にいてやろうかなって…いろいろ持ってくる(…) とかして、…みんなで心配して(…) 家ででも、電話連絡でも、2人がね、話し合いしっかりしたらですね、いいかなあって思いますね、2人で仲良く…協力してみてもやらねえって思うようになりましたよね (A)

やっぱああ、よくこういうのを(家族で) 乗り越えて

これたのかなあっていうのは(ありますね)、主人と、自分と子ども、家にいる子どもたちと、ちゃんとコミュニケーションがとれている状態ができてるので、全体的にはなんか安定している感じはします(B)

お昼間にも電話があったりとか、なんにもないけどどうしているのかなど、ちょっと気にしてかけてきたりとかしました、やっぱり調子悪いときとか特に…まあ嬉しいというか、子どものことを考えてくれているというのもあるし家族で、いれることが幸せみたいな感じはますます増したっていうのはあります(C)

### 3) 父親への気遣い

あまり、きついか、っていうことを言わない人なので、言ってくればもっとストレス解消できるのだろうなあ…(B)

言わないけど多分きついきもあったのだろうなって思います(C)

### 4) 変化の肯定的な受け止め

でもやっぱり子どもがこの入院してからはやっぱりあの…ちょっと2人まーるくなったような感じではありませんよね…、前はもう、なんか意見2人ともこうでもないああでもないって言って、あの、私もこうって、お互いの意見をぶつけてましたけどね。けど子どもが入院してからは、両方ともがこう穏やかになって、まずは子どもを穏やかにみて、お世話したい、みてやりたいっていう感じで2人ともちょっと穏やか、少し穏やかになったかなっていう感じですね、土日は仕事がないから、自分が交代するよって、それはすすんで言ってくれましたね、そんなところがやっぱり変わったかなって思いますね(A)

私がないときの母親役をしているのだと思うのですが、前はやっぱりなかった部分ができてくるのかなっていうのはありますね(B)

だいたいあんまり表現しない人だから、特別そういう反応はないけど、まあ、ちょっと自慢げに「(自分のことを)頑張ってるやろう」みたいな感じで言って来たりとか、恥ずかしくてメールでそんな言ってくることもある、だいたい変わったかなとかは思うんです(C)

### 5) 頼りがいのある父親

また父親の良さとかありますもんね、ずうっと一緒にいるよりもね、また時々代わったほうがいいですよ、男は男なりに話があるみたいだしね、父親との、男同士でする話も、うん、よかったんじゃないかなあって思いますね(A)

(患児の病気について、同胞への告知をすることについて) いや、主人が言ってくれてよかった。やっぱり家族の大黒柱が話してくれたほうが、私が言うよりも、主人が言ってくれてよかった(B)

(おとうさんが家にいてくれることについて) やっぱり下の子もわたしがあまりいないので、お父さんを慕ってるところもあるし、おばあちゃんたちじゃどうしても無理なところもある(C)

## IV. 考察

### 1. 父親の入院前後の役割の変化

父親の役割の変化を母親は、【家事はしない、してもちょっとしたもの】から【可能な家事を自ら行う】へ、【関心のある範囲内での子どもの相手や世話】から【母親、子どもの心身のサポート】、【私とは異なる子どもへの関わり】と役割が拡充していると認識していた。ある母親は父親が仕事をしていることで【入院をささえている】と再認識していた。またその役割の認識は家庭全体への関わりになっていることが伺えられた。実際に父親を対象にした研究を見ると、橋爪らは「患児の発症後に『家事』、『家族の健康管理』、『家族の悩みの相談相手』、『家族の病気の治療についての相談や決定』、『子どもの世話』、『子どもの遊び相手』、『子どものしつけ』を父親の役割であるとする父親は増加しており、患児の発症により父親の役割意識には変化が見られていた<sup>4)</sup>と述べている。本研究で母親が認識した父親の役割は、先行研究(上記)で述べられている父親の役割意識にはほぼ基づいたものであり、【関心のある範囲内での子どもの相手や世話】が行われていた入院前の生活から、さらに患児や同胞、母親を気遣う父親の姿勢を母親は、【母親、子どもの心身のサポート】として認識していた。また、橋爪らは「患児の入院中、父親が仕事の時間や個人の時間を削り、家庭生活を維持するための時間を捻出している」<sup>4)</sup>と述べており、本研究でも父親は時間を作り、【可能な家事を自ら行う】ことをしていた。さらに、【私とは異なる子どもへの関わり】として、男同士の会話や児との関わり、大黒柱である父親が患児の病気について同胞へ告知を行ったことを父親の役割として語っていた。このような父親の姿勢を、母親は積極的・主体的になったと認識していたと思われる。

### 2. 母親が入院前後で感じる父親への思い

入院前では母親の求める父親の家事参加と実際の行動の間に差があることから【依存されている苛立ち】を抱え、それが夫婦間の負の連鎖となっていた。また、その苛立ちから【父親に対する要求】が生まれても、【あきらめ】を感じていた。しかし、大きな家族への課題をもたらすのがんの告知から、子どもの入院、治療を通して、両親共に患児最優先に考えが向くようになる。田邊らは、『小児がんの子どもと共に歩む父親の闘病体験の中』から、父親が奈落の底から立ち上がり、今ある子どもの命に集中したと述べていると報告している<sup>7)</sup>。小児がん闘病経験をトラウマと考え、生じている心の問題をPTSDとしてとらえる考え方は1994年より生まれた<sup>8)</sup>。小児がん患児、母親、父親のPTSD、外傷後ストレス症状(posttraumatic stress symptoms: PTSS)に関する実証的研究により、児よりも父母の方がより闘病中のPTSSの頻度が高いことが報告されている<sup>9-10)</sup>。その様な背景の中で、本研究における対象者の夫は自分ができる

ことを母親や家族に主体的に積極的に示した。その姿勢を母親は肯定的に認識し、【有り難い存在】として受けとめている。父親が患児や同胞のことを中心に考えた発言をしてくれることを母親は喜び、父親の心身面の変化を受け、母親は父親と【がん闘病の過程を共に乗り越えている実感】を抱いている。共に乗り越えている実感は【有り難い存在】という感謝の気持ちを生み、感謝は【がん闘病の過程を共に乗り越えている実感】へとつながり、正の相互作用となる。また、父親の変化の中で【私とは異なる子どもへの関わり】が【頼りがいのある父親】として認識され、それが【有り難い存在】の気持ちを増復させていた。尾形は、「父親の一方的な関わりのみではなく、母親の認知によって夫婦関係が形成され、そのことがまた家族機能系に影響を与える」<sup>11)</sup>と述べており、本研究においても、母親は認知された入院後の父親の役割を【変化の肯定的な受け止め】とし、【有り難い存在】という父親の存在価値や【がん闘病の過程を共に乗り越えている実感】を生み出していた。さらに感謝と共に乗り越える実感により、【父親への気遣い】が芽生えている。共に乗り越えている実感は物理的に離れた状況にあっても、今まで以上の家族の絆を感じ、少しの間でも一緒にいられることの幸せを感じていた。(図1.2) 森は小児がん患児をもつ家族の危機のひとつに「夫婦間の感情的ずれ」をあげている<sup>2)</sup>。本研究において、インタビューを受けた母親3名は父親を肯定的に受け止め、【頼りがいのある父親】として認識していた。入院前に感じていた夫婦間の感情的ずれは、減少し、お互いを尊重し気遣う関係となっていたと考えられる。

医療者の役割として、小児がんにより長期入院している患児に付き添う母親に対し、夫婦関係が良好に保たれ、より強固な関係になるようサポートするには、医療者は父親からの患児を含む家族へ積極的な関わりがみられた際、母親に対して父親を肯定的に意識化させ、言語化できるような関わりを行っていくことが重要であることが示唆された。

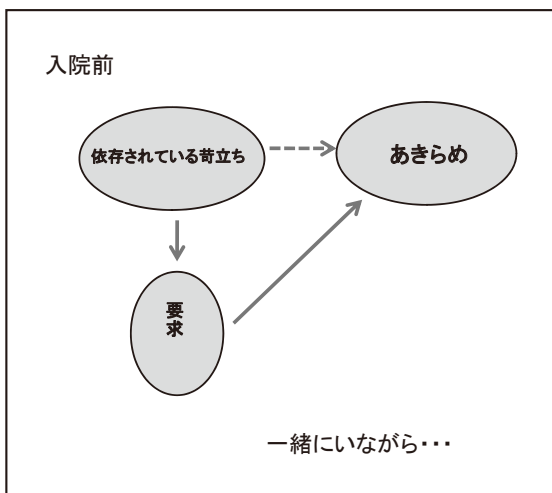


図1. 入院前の父親への思い

V. 研究の限界

本研究の限界は、1施設での調査であり、対象者数も3名と少なく（抽象度に違いが生じている可能性がある）一般化という点で限界がある。また、病状の変化時や予後がおもわしくない時期は避け、患児の病状が安定している時期での調査であるため、母親の思いに偏りの可能性がある。今後は、対象者数を増やし調査時期も検討していく必要がある。

VI. まとめ

父親の役割変化を母親は【家事はしない、してもちょっとしたもの】から【可能な家事を自ら行う】へ、【関心のある範囲でのこどもの相手や世話】から【入院を支える】【母親、子どもの心身のサポート】、【私とは異なる子どもへの関わり】へと役割が拡充していると認識していた。その中で、母親の父親への思いは【依存されている苛立ち】あるいは【あきらめ】から父親に対する【変化の肯定的な受け止め】や【頼りがいのある父親】より、【がん闘病の過程を共に乗り越えている実感】【有難い存在】へと変化しながら、父親がいてくれることについて高く評価し、【父親への気遣い】を示していた。

謝辞

本調査にご協力いただいたお母様方とA病院師長はじめスタッフの皆様へ感謝申し上げます。

文献

- 1) 星 順隆：小児固形腫瘍患者・家族へのサポート。小児科診療，4：651-656，2004
- 2) 森美智子：小児がん患児の親の状況危機と援助に関する研究（その1）－闘病生活により発生する状況危機要因－。小児がん看護，2：11-26，2007
- 3) 小澤美和・細谷亮太：生活支援－白血病 よりよい理解に基づく診療のために。小児科診療，65（2）：261-266。2002

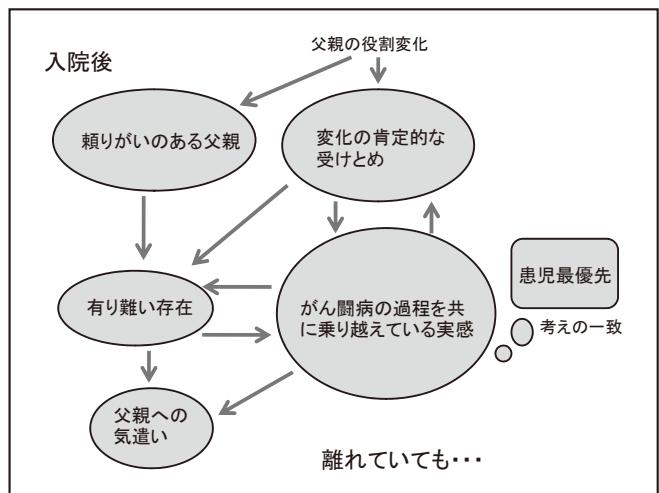


図2. 入院後の父親への思い

- 4) 橋爪永子・杉本陽子：小児がん患児の発症前後での父親の生活と役割意識の変化. 日本小児看護学会誌, 15 (2) : 46-52, 2006
- 5) 中野綾美：小児の発達と看護. 小児看護学で用いられる理論. ナーシング・グラフィカ, 46-62, 2010
- 6) 田邊美佐子・瀬山留加・神田清子：小児がん経験者の子どもを持つ父親と母親の語りからみる療養生活構築のプロセス. Kitakanto Med J 58 : 35-41, 2008
- 7) 田邊美佐子・神田清子：小児がんの子どもと共に歩む父親の闘病験. 高崎健康福祉大学紀要, 7 : 13-23, 2008
- 8) 小澤美和・細谷亮太：小児がん患者の精神腫瘍学. 臨床精神医学, 33 (5) : 597-600, 2004
- 9) 高宮静夫・松原康策・川添文子・磯辺昌憲：小児がん患児をもつ母親, 父親の外傷後ストレス症状. 小児がん47 (1) : 60-67, 2010
- 10) Margaret L.Stuber,M.D DimitriA.Chiristakis,M.D: Posttrauma Symptoms in Childhood Leukemia Survivors and Their Parents. Psychosomatics, 37: 254-261, 1996
- 11) 尾形和男：「父親の子育てへの関わり」についての夫婦間の認知のずれと夫婦関係, 家族機能及び父親の変化との関連. 群馬社会福祉短期大学紀要, 5 : 63-87, 2001

# The father's role change and mother's feeling when their child becomes hospitalized for Cancer treatment

Aya ERI<sup>1</sup>, Izumi OHMACHI<sup>2</sup>, Kanako MORIFUJI<sup>2</sup>

Yukari TAKIGAWA<sup>3</sup>, Yuko NAKAO<sup>2</sup>

1 Nagasaki University Hospital

2 Department of Health Sciences, Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

3 Master Course, Health Sciences, Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

Received 3 April 2011

Accepted 30 June 2011

**Abstract** The objective of this study is to clarify how a father's role changes when his child becomes hospitalized for cancer treatment. We interviewed mothers of childhood cancer patients and asked them about any paternal role changes they had noticed. The interview results indicate that, in order to stabilize the treatment process for their children, these fathers went from 'doing little or no housework' to 'doing more of the housework'. They also went from just 'playing with their children' to actually 'supporting the physical and emotional state of their wives and children'. As a result of these paternal role changes, the mothers of these childhood cancer patients went from feeling 'powerless' and 'get impatient' with their husbands to feeling 'appreciative of their husbands new role, dependability, and support for the family with me'. These mothers had a highly valuation with their husbands.

Health Science Research 23(2): 15-21, 2011

**Key Words** : Childhood cancer, Father's role, Change of role, Mother